

子育てと仕事の両立を支える環境をつくる



くすもと小児科病後児保育室とスタッフの皆さん

お尋ね
くすもと小児科病後児保育室
(稲荷・☎③7828)
さいくさ小児科病後児保育室
(権常寺一・☎③1005)
あずま小児科病後児保育室
(瀬戸越四・☎④6600)
かんべ小児科病後児保育室
(木宮・☎④5711)

ことし4月に開設されたくすもと小児科病後児保育室(稲荷町)には、10月末現在で約二百人が登録し、1日平均2人、月平均50人が利用しています。広く取られた窓からは日差しがあふれ、窓の外を歩き来する電車を眺めることもでき、子どもたちの心を和ませています。

プランの目標
・利用状況を考慮し、市中心部への開設を検討
3カ所(13年度) ↓ 現状 4カ所(17年度) 目標達成
・利用者の意向を踏まえ、利用方法を再検討する

病後児保育室

市内の小児科医院に併設された病後児保育室では、病気が回復期にある児童が保護者の仕事などの理由で保育を受けられない場合に、保育を行います。

1日6人までの受け入れが可能です。本市では、平成12年から病後児保育サービスが始まり、これまでは市北部・東部の3カ所に施設がありました。市中心部で



市役所1階男性トイレ

市民アンケートでも家族・夫婦間の協力理解が求められているように、子育ては母親がするものだという社会通念がいまだに残っています。しかし、「夫婦で協力して子育てをする」ことは当然であるという考えから、最近では積極的に子育てする父親も増えてきています。

父親が子育てする環境づくり

病後児保育室の利用には事前登録が必要で、対象者は市内の保育園や幼稚園などに通園している幼児と小学校低学年の児童です。かかりつけでなくても利用は可能で、その際は受診中の病院からの連絡表が必要です。

お尋ね
市役所子育て家庭課
(☎④1111)

夫婦とも看護師として働いているので結婚当初から家事は分担し、子育ても「夫婦の子どもだから2人で育てる」のは当然だと思ひ、何でもやっています。幼稚園に通う子どもは週1回の弁当も毎回作っています。

職場の理解もあり勤務の調整もしてもらっているので、参観日はほぼ100%の出席率です。最近の参観日には仕事の合間に顔を出すお父さんも増えてきました。職場は半分近くが男性ですが、みんな参観日には出席しているようです。

子育ては限られた時期しかできないものだからこそ、後悔しないようにしたいです。

インタビュー
田中 英樹さん (有福町)



施設などの男性トイレにもベビ子エアを整備するなど、父親の子育てに対する意識の浸透を図っています。

健やかに子どもを産み育てることのできる環境をつくる

子ども発達センター

平成10年に花園町のふれあいセンター内に開設されました。「診療・療育部門」では、心身の発達に遅れや障害のある子どもに、専門の医師や保健師などが療育相談や診療、機能訓練を行います。利用者数も年々増加し、市外からも利用者が訪れ、県北地域の療育拠点施設となっています。

【診療・療育部門】
障害児通園(デイサービス)事業「にこにこルーム」では、動きや言葉などの障害に応じて子どもたちが5つのグループに分かれ、週1〜2回親子で通園しています。保育士とセラピスト(理学療法士・作業療法士・言語聴覚士)が一緒に遊んで、遊びを中心とした保育を行っています。

プランの目標
関係機関との連携強化
障害児通園(デイサービス)事業の一層の質の向上
(登録者の年間利用予定者数に対する延べ利用者数の割合)
現状 55%(16年度) ↓ 目標 60%(21年度)
親子交流部門利用者数の増加
(市内の6歳以下の子どもと保護者に対する年間利用者数の割合)
現状 75%(16年度) ↓ 目標 81%(21年度)



「にこにこルーム」で保育中の親子

お尋ね
子ども発達センター
(☎③3945)

毎週月曜日に同センターで行われている巡回子育て支援「シーユー」は、在宅就園の親子連れが誰でも自由に集い、遊べる場です。毎回40組前後の親子連れが参加しています。保育士による触れ合い遊びや育児に関する情報を提供したり、育児に関する相談にも応じたりしています。



巡回子育て支援「シーユー」で交流する親子連れ

幼児ことばの教室

子ども発達センターの関係機関の一つに幼児ことばの教室があります。昭和62年に県内で初めて幼児を対象に開設され、「発音が正しくできない」「言葉を話し始める前に言葉が出にくかったり同じ音を繰り返したりする」「言葉を分かってはいるのにうまく話せない」「話しを聞くことが苦手」などの症状がある幼児の相談に応じ、必要に応じて通級指導を行っています。



お尋ね
幼児ことばの教室
(☎・ファクス⑤5695)

言葉は感情表現や意思伝達の大切な手段です。心身の調和の取れた発達のためにも、言葉の問題は早期発見・早期教育が重要です。教室では、家族と一緒に子どもとの成長と言葉について考え、子どもと一緒に遊びながら楽しさを共有し、言葉の発達を促すようにしています(18年度の募集については本紙16ページ参照)。